

国立民族学博物館の収蔵品⑦1

バードカービング



トキ(飛翔型)のタッチカービング。翼を広げたトキの迫力に圧倒される。

バードウォッチングからバードリスニング、さらにバードタッチングへ。見る鳥もいいが、聴く鳥は味わい深く、さわる鳥は自然とともに「生きる」意味を僕たちに問いかける。

今、僕は早起きして、この原稿を書いている。真夏は暑くて仕事が多忙だが、たまに早起きすると、朝の静寂と涼しさの中、頭が冴える。全盲の僕は、多種多様な鳥の声で朝を感じている。鳥の鳴き声と名前を結び付けることができれば楽しいだろうが、僕はそこまでの風流人ではない。でも、鳥はいつも僕に優しく語りかける。「さあ、早く宿題を片付けて、元氣よく出かけようぜ」。

民博では継続的にバードカービングを収集・展示してきた。狩猟用の四であるデコイをルーツとするバードカービングは、今日では鑑賞目的の木彫作品として欧米等で親しまれている。いかに本物の鳥そっくりに見えるのかを競うコンクールも盛んである。バードカービング

は、屋内でのバードウォッチングの可能性を広げた。現在、僕たちは各地の博物館で珍しい鳥のカービングを見ることが出来る。

民博が所蔵するバードカービングは、内山春雄氏の作品である。内山氏は「目の見えない人に鳥の生態を伝えること」を願い、タッチカービングを考案した。繊細な足や嘴の部分にはボルトや針金を入れて、カービングの強度を確保する。これまで視覚障害者はバードリスニング、すなわち鳴き声を聴くことで「目に

見えない鳥」を想像してきた。内山氏のタッチカービングにさわれば、鳥の大きさ、形を実感することができる。そもそも、空を飛ぶ鳥には、誰もさわることができない。それゆえタッチカービングは、バードタッチングという新たな娯楽・学びを万人にもたらすツールということもできるだろう。

二〇〇六年にはスズメ、カラスなど、身近な鳥のカービングを収集した。カラスの全身を手のひらで確かめた来館者は、一様にその大きさに驚く。一方、指先を介して、小さなスズメにシンパシーを抱く人が多い。二〇〇九年には、日本を代表する鳥であるトキのカービングを購入した。トキの保護活動に関連するニュースはマスコミでもしばしば取り上げられるが、その姿を間近で見ると、ましてさわられる機会はほとんどない。タッチカービングを通じて、僕たちはトキの肉付き、顔や翼の細部をさわって知ることができる。「トキって、ずんぐりした鳥なんだ」。触覚に基づく意外な発見が、ウォッチングやリスニングでは得られない鳥に対する親近感を生み育てるのは確かだろう。

二〇一九年、民博のバードカービング・コレクションにダーウィンフィンチ(五体)が加わる。今を「生きている」鳥の実像のみならず、過去から現在に「生きてきた」、そして未来へと「生きていく」鳥の歴史と多様性を伝えるのがダーウィンフィンチの役割といえる。ダーウィンフィンチをも含む民博所蔵のすべてのバードカービングは、二〇二〇年開催の特別展「ユニバーサル・ミュージアム」(仮称)で公開される予定である。生きていく、生きてきた、生きていく鳥たち。特別展が、そんな豊かな生物の世界に触れる場になれば嬉しい。僕はタッチカービングが「ユニバーサル」誰もが楽しめる」特別展の精神を具現するシンボルになると確信している。

見る鳥、聴く鳥、さわる鳥(時に食う鳥も)。さまざまな鳥がいて、それらを楽しむさまざまな方法もある。内山氏の優れた作品を用いて、さまざまな「生」のあり方を社会に発信するのが、令和という新時代を迎えた民博の使命なのかもしれない。さあ、宿題はできた。鳥の声に誘われて、白杖を片手にそろそろ出かけるとしよう！

(広瀬浩二郎)